

良書廃棄へ向かう自治体図書館

近くに中規模の市立図書館分館(蔵書約 20 万冊)がある。便利なので月 2, 3 回は利用するが、行くたびに相当数の蔵書が廃棄されているのを目にし、驚いている。

蔵書廃棄は、一応、「リサイクル」の名で実施されている。図書館で不要とされた(と思われる)本が、リサイクル棚に並べられ、誰でもタダで持ち帰ることが出来る。「捨てる」のではなく、「リサイクル」であり「再利用」だという名目で、行われているのだろう。

しかし、図書館利用者の側からすれば、たとえ「リサイクル」名目であれ、廃棄されれば、もはやその本は無くなり、利用できなくなる。不便だ。(同じ本の新版買い替え所蔵もあろうが、多いとは思われない。また、複本所蔵で廃棄後何冊が残る場合でも、後述のような問題がある。)

図書館の蔵書廃棄は、書庫不足が最大の理由であろう。限られた収納スペースに、どの本を並べておくか? 悩ましい問題である。

図書廃棄は大学図書館ですら行っているのに、自治体図書館だけの問題ではないが、廃棄される本(と残される本)の質という点では、自治体図書館の方がはるかに深刻だと思われる。

図書館が新しい本を買い不要な本を廃棄するときの評価基準は、大学図書館の場合は教育研究にとっての必要性だろうが、自治体図書館の場合は何であろうか?

自治体図書館の選書には、一市民としての推測にすぎないが、選書委員会のようなものがあるにせよ、実際には地元住民からの要望が強く働いているのではないかとと思われる。自治体図書館は、身近な施設なので、住民の声をまず第一に聞かざるをえない。その結果、優先的に購入されるのは――

- ・受賞、映画化などで話題になっている本。
- ・地元利用者からの購入希望の多い本。
- ・住民自身は自分の金では買いたくはないが、ちょっと見てみたいハウツー本や実用書。旅行案内、料理本、生活相談、健康本、人生訓、冠婚葬祭解説など。

自治体図書館は、民主的であればあるほど、住民の声を聞けば聞くほど、これらの本を重点的に買う。しかも、ベストセラーなど、話題になり要望が強ければ強いほど、同じ本を 10 冊、20 冊と大量に買い込む(複本購入)。

その結果、書架(書庫)はすぐ満杯になり、利用の少ない本が押し出され、リサイクル(廃棄)に回される。そして、書架は、ベストセラー一本(すぐ忘れられ、残されるのは結局 1, 2 冊だが)や「すぐ役に立つが自分では買いたくない」実用書、あるいは一定の政治的傾向をもつ――政治的要望の根強い――時事政界本などに席卷されるということになる。

自治体図書館が、実際に、どのような本を新たに購入し書架に並べているかについては、図書館に行って直にご覧いただくか、あるいは各図書館ホームページの新規購入図書案内でお確かめ下さい。

以下は、最近、近所の上記中規模市立図書館分館に行ったとき、たまたま目にし、タダでもらってきた本のごく一部である。私にとって、図書館は、館内書架よりもリサイクル(廃棄)本棚の方が魅力的になりつつある。

宮原寧子『ヒマラヤン・ブルー』
ヤンツォム・ドマ『チベット・家族の肖像』
重廣恒夫『エベレストから百名山へ』
シュタイニッツァー『日本山岳紀行』
坂田・内藤・臼田・高橋編『都市の顔・インドの旅』
渥美堅持『イスラーム教を知る事典』
梅棹忠夫『二十一世紀の人類像』
太田昌秀『沖縄の民衆意識』
萱野茂『イヨマンテの花火』
野口武彦『江戸のヨブ』
戸沢行夫『江戸がのぞいた<西洋>』
大林太良編『岡正雄論文集 異人その他』
加賀乙彦『ザビエルとその弟子』
ライシャワー『ライシャワーの見た日本』
佐竹靖彦『梁山泊』
吉田洋一『零の発見』
筒井清忠編『新しい教養を拓く』
吉本隆明『世界認識の方法』
小田実『生きとし生けるのものは』
田口裕史『戦後世代の戦争責任』
佐渡龍己『テロリズムとは何か』
中村光男『風俗小説論』
日野啓三『書くことの秘儀』
D・ブアスティン『クレオパトラの鼻』
N・サーダヴィ『イヴの隠された顔』
ユング『タイプ論』
池上俊一『動物裁判』
カリエール『外交談判法』
ヴァイツゼッカー『良心は立ち上がる』
W・J・パーマー『文豪ディケンズと倒錯の館』

M・ブーバ＝ノイマン『カフカの恋人 ミレナ』

デカルト『方法序説』

トマス・ペイン「コモン・センス」

J・S・ミル『ミル自伝』

.....



■最近入手の図書館リサイクル本

【参照】「これから日本のあちこちに新しい「コモン」が生まれてゆくと思います。そのときに核になるものの一つは書物になるだろうと思います。書物は私有になじまない財であり、それゆえ新しいコモンの基礎となることができる。」、内田樹「[倉吉の汽水空港でこんな話をした。](#)」2021-02-08

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa [編集](#)

2020/11/03 at 16:37

カテゴリー: [教育](#), [文化](#), [本](#)

Tagged with [選書](#), [図書館](#)

老化の悲哀

生物にとって老化・老衰は宿命とはいえ、いざそれが自分の身に現れ始めると、当初は「まさか、まだ」と疑い、見て見ぬふりをし、ごまかして安心しようとするが、いつまでもそのようなことは続けられるはずもなく、どうしても否定しきれなくなると、落胆し、あきらめ、結局は認めざるをえなくなる。



■チトワン

私は、小身瘦軀(中学以降、2年ほど前まで163cm/52kg 前後)だが、幸い、いたって健康で、これといった病気には一度もなったことがなく、健康診断や予防注射も法定義務となっているもの以外は受けたことがなかった。

そんな私にも、70歳を過ぎるころから身体に少しずつ異変が現れ始めた。頭髪が抜け、視力が落ち、眠りが浅くなった。「あれ、変だなあ……老化が始まったのかな？」とは思ったが、まだ、老化といっても、どこか他人事、自分自身のこととしては見ていなかった。



■ピラトナガル付近

ところが、母の介護で少々無理をし疲労蓄積を感じ始めた2年ほど前のある日、風呂に入り鏡に映った自分の身体を改めて見てみて、愕然とした——肋骨が浮き上がり、まるで骸骨のよう。あわてて小型体重計を買ってきて量ると、わずか45kg。中学生になって以降、もともと痩身ではあったが、こんなに痩せ細ったことは一度もなかった。

これは大変と、以後、栄養のありそうなものを出来るだけたくさん食べるようにしてきたが、いまもって体重は元の52kg前後までは戻らない。いくら努力しても45kg前後の維持が精一杯。なぜだろう？

当初、体重減は介護疲れによる一時的な現象と頭から思い込んでいたが、いつまでたっても体重が回復しない現実を目の当たりにすると、本当の原因は病気か何か、別のところにあるのではと疑わざるをえなくなった。そこでイヤイヤながらも健康診断を受けてみたが、出た数値はどれも年相応、特に異状なし、ということであった。

あれ、医学的にはどこも悪くないはずなのに変だなあ、とあれこれ思案していて、ハタと気付いた——これは自然な老化現象の一つにちがいない、他の動植物と同様、私も老化で痩せていき、いずれ骨と皮のようになり、枯れ果てる宿命なのだ、と。こうして、いささか遅ればせながらも、老化・老衰が、直視せざるをえない自分自身の現実の問題として切実に意識されるようになったのである。



■キルティプルより

私の老化は、今年に入り、新型コロナ(コビト19)感染拡大とほぼ同時に始まった鼻と眼の異常な乾燥により、さらに一段と進行したことが明白となった。いわゆるドライノーズ、ドライアイである。

はじめ鼻(鼻腔)が渴き始め、それが徐々に眼にも及んでいった。この時も、当初はまだ、風邪でも引いたのだらうと思い、たいして気にもしていなかったが、症状は、良くなったり悪くなったりを繰り返しながら、全体としては着実に悪化していった。

鼻腔がカラカラに乾き、嗅覚が異常に過敏となり、さらに激痛が始まり、時々出血さえする。これが四六時中。しばらくすると、鼻腔に加え、眼も乾き始めた。眼球を動かすと、ホコリが入っているかのような違和感を感じ、痛む。これも四六時中。

鼻にはドライノーズ用スプレー、眼には涙型点眼剤を使用。さらにマスクを湿らせ、昼も夜も一日中、着けるようにした。

が、それでも眼も鼻も治らない。そのため、夜は頻繁に目が覚め、熟睡できない。そして昼間も、鼻と眼の不快感の痛みに加え、重度の不眠のため、イライラしたりボウーとしたりして、集中して何かを考えたり行ったりすることは、およそ出来ない。

このような状態が続き、改善の兆しも見えないので、すっかり参ってしまい、再び怖ごわ健康診断を受けてみたが、またしても特に異状は無し。検査結果で見る限り、74歳にしては、数値的には健康なのだ。

とすれば、これもまた、痩せと同様、自然な老化現象の一つと覚悟せざるをえない。これまで鼻や眼に潤沢に供給され、それらを水みずしく保ってきた鼻水や涙が減り、涸れ始めたのだ。イヤなことだが、これも自然必然、なんとかやり繰りし折り合いをつけつつ、完全に涸渇し枯れ果てるまで生きていく以外に方法はなさそうだ。



■キルティプルより

むろん、こんなことを書くと、何を大げさな、老化など誰にとっても当たり前のことではないか、と呆れられ笑われるかもしれない。が、前述のように、少なくともほとんど病気知らずで生きてきた私自身にとっては、このような体重減や眼鼻の不調は初めての経験であり、したがって、それらにどう対処し、どう折り合いをつけていくべきか、まったく見当もつかなかったのである。

だから、このブログも、2020年6月10日の記事を最後に、これまで長期にわたって投稿してこなかった。関心のある情報を集め、読み、分析し、自分なりに評価して文章化することが出来なかったからである。

それでも、この半年余りの悪戦苦闘の結果、体重減や眼鼻の不調は自然な老化現象なのだと諦め、身体と精神をそれに合わせていくしかないことに気づき始めた。老化は、これから先、確実に、さらに加速度的に進む。それと折り合いをつけつつ、できるだけ平穏に生きていくように心掛けたい。わが愛犬が、痩せ細り骨と皮のようになりながらも、最後まで愛嬌を振りまきつつ、眠り込むように18年の生涯を全うしたように。

諦念は悟りであり救いである——そう願いたい。



■カトマンズ

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa [編集](#)

2020/11/01 at 16:35

カテゴリー: [健康](#), [宗教](#), [文化](#)

Tagged with [老衰](#), [老化](#), [高齢化](#), [諦念](#)